

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, 美しく清潔なブルネイ・ダルサラーム国
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 114, No. 11, pp. 30-31
Citation(English)	, Vol. 114, No. 11, pp. 30-31
発行日 / Pub. date	2017, 11



知財見聞録

美しく清潔なブルネイ・ダルサラーム国

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

魅惑的で隠れた存在感を見せる ブルネイ

匿名任務によりブルネイを訪問する機会を頂いた。ブルネイというと「石油資源でお金持ちの国、でもどこにあるかよく分からない」。こんな回答が返ってくる魅惑的な存在。いまだ未知の国という方も多いことと思う。そこで今回は、ブルネイを紹介したい。

ブルネイの概要

通称ではブルネイと呼ぶが、正式な国名は、ブルネイ・ダルサラーム国。イギリス連邦加盟国である。ボルネオ（カリマンタン）島の北部に位置し、マレーシアに囲まれた、人口約40万人、国土面積5765km²の小さな国である（なんと、三重県（面積：5777km²）とほぼ同じ大きさ）。

首都は今回筆者が訪問したバンドルシリブガワン。元首はハサナル・ボルキア国王（スルタン）。公用語はマレー語だが、多くの人が英語を話し、宗教についてはイスラム教の信者が約8割と大半を占めている。

国の主な産業は豊富な石油や天然ガスの輸出であり、その収入を財源として医療費や教育費は政府が負担している。さらに個人に対する所得税がかからない。現地の方は車も安く買えると言っていた。首都圏での移動手段は車で、外を歩いている人はほとんど見かけない。

いつから油田開発？

産油国として資源輸出で潤うブルネイだが、原油の商業生産が開始されたのは20世紀初頭である。1929年には油田が発見され、1950年代中期からは海洋鉱区の探鉱も行われるようになり、海洋油田が次々と探し当てられていった。初期の油田では、随伴ガスとして天然ガスが得られていたが、1970年以降は海洋油ガス田の発見により、LNG輸出が本格的に行われている。

このように、石油資源が発見されるなか、1984年にブルネイはイギリスから独立を果たすわけであるが、資源が豊富に産出されるブルネイをよくイギリスが手放したと思ひ、少し調べてみた。

独立の経緯

第二次世界大戦中の1942年から1945年の間、石油資源目当てに日本軍がブルネイを占領した。戦後にブルネイ、英領マラヤおよび海峡植民地を日本から取り返したイギリスは、ブルネイや周辺のイギリス植民地を統合してマラヤ連邦として再編成する計画を進めた。

しかしマラヤ連邦に加盟すると、ブルネイの主要財源である石油の売り上げが連邦政府のものになる仕組みだったため、スルタンはこれに加盟しない決断をした。その後、マラヤ連邦は1963年にマレーシアとして独立したが、ブルネイは引き続きイギリス保護

領のままの道を選んだ。戦後の疲弊、国際連合による脱植民地化の動き等により、民族独立に向けて歴史が大きく転換していくなかで、スルタンは非常に難しい決断をしたことと思う。

1970年代に入るとイギリスでは植民地政策に反対する世論がますます高まっていく。そこでイギリスが取り計らったところ近隣のマレーシアとインドネシアはブルネイを尊重すると宣言した。これによりブルネイは1984年に独立を果たすことになる。

現代の凡人には夢のまた夢の出来事であり、今なお国民の強い支持を受けているスルタンの胸の内を察することはできない。

ブルネイの知的財産権制度

ブルネイの知的財産権制度の現状は十分に知られていない。従来、同国の知的財産権は総理府に所属している法



ブルネイ知的財産庁長官や職員と

務総長室（AGC：Attorney General's Chambers）の登録部門が所管していた。しかし2012年1月1日、ブルネイ経済開発局（BEDB：Brunei Economic Development Board）に特許登録部（PRO：Patent Registration Office）が設立され、AGCから独立した特許の管理体制ができた。

当初、PROは特許の登録を担当したが、2012年10月1日に意匠登録業務、2013年6月1日には商標登録業務も移管された。この時をもって、PROの下で全ての工業所有権の登録業務を扱う組織としてブルネイ知的財産庁（BruIPO：Brunei Intellectual Property Office）が設立された。

ただし、著作権と半導体レイアウトに関しては、引き続きAGCの国際貿易・知的財産部の権限の下で管理されている。BruIPOの設置により、国家の知的財産権管理体制が再構築され、

現在、特許、商標、意匠、植物新品種の登録が管理されている。

現状では、まだ小さな組織

BruIPOの目標として、

- ・アイデアと革新を保護するために、アクセス可能で分かりやすい特許制度を提供する
- ・商標と意匠の利益と保護に対する意識を高め、ビジネスの成長と競争力を強化する
- ・創造性と革新が芽生える「知的財産文化」を促進し、発展させる
- ・国家イノベーション・エコシステムを支援するためのパートナーシップを確立する

がうたわれており、今後の発展に期待したい。しかしながら現状、BruIPOの人員は19人と大変限られているし、出願件数もこれからといったところである。

未来に向けたスルタンの強い意志

ブルネイ国際空港から搭乗したロイヤルブルネイ航空の座席で、国民が尊敬するスルタンの活動記事が掲載されている雑誌を手にとった。そこには「陛下が誠実に取り組む課題とブルネイの新世代への希望」と題して、国内の若者に対するスルタンの特別な関心を反映し、青年の参画、教育、機会を最優先事項として、経済改革と青少年開発の革新的なプログラムを結び付け、世界における競争力とリーダーシップのために若者を活性化させていくことが記されていた。

また1984年1月1日に主権を回復し、スルタンが自らの国を前進させて成功に導いたブルネイを次世代に引き継いでいくことや、若者に明日への大きな可能性を託していることも広く表明されていた。



スルタン・オマール・アリ・サイフディーン・モスクにて



空港ラウンジで国王の写真と